

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11007

研究課題名（和文）「気になる子ども」に対する保育施設での発達支援に向けた基盤的研究

研究課題名（英文）Fundamental research on developmental support for "children with special care needs" at childcare facilities

研究代表者

中山 静和 (Nakayama, Shizuka)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教

研究者番号：30728051

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、保育施設に勤務する保育者の「気になる子ども」への対応の現状と課題について明らかにすることである。私立保育園に勤務する保育士9名を対象に、半構成面接調査を実施した。データをEarly Start Denver モデルの発達カリキュラムチェックリストをもとに9つの発達領域に分類し、対応の傾向について分析した。「気になる子ども」が示す危険行動などの「行動スキル」への対応が最も多く、「遊びスキル」と物のサイズや形を認識する「認知スキル」への対応が最も少ないことが明らかになった。「気になる子ども」が発達を示している発達領域を把握し、効果的に伸ばせるプログラムを構築する必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育施設に勤務する保育者による「気になる子ども」への対応の現状と課題について、エビデンスが示されている発達障害児向けの支援モデルを用いた分析結果は、国内における「気になる子ども」の発達促進に向けた支援プログラムを検討する基盤となりうる。

本研究により、保育者自身の「気になる子ども」の行動や発達への理解、対応の現状と課題への認識が高まることで、個別的な対応方法を意識した保育プログラムの探索と継続による成長発達の保障につながるとともに、保育施設に勤務する看護職などとの連携・協働の強化が期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to determine the current status and issues in dealing with children with special care needs by childcare workers at childcare facilities. A semi-structured interview survey was conducted with nine childcare providers working at a private daycare center. Data were categorized into nine developmental domains based on the Early Start Denver model developmental curriculum checklist, and trends in responses were analyzed. The most frequent responses were regarding behavioral skills, such as risky behaviors exhibited by children with special care needs, and the least frequent responses were regarding play skills and cognitive skills, such as recognizing the size and shape of objects. These results suggest the need for early identification of developmental areas in which children with special care needs show developmental potential, and the need to construct programs that can effectively develop these areas.

研究分野：小児看護学

キーワード：気になる子ども 保育施設 発達支援

1. 研究開始当初の背景

近年、我が国の保育施設において、健康な子どもに留まらず、慢性疾患を抱える子ども、医療的ケアを必要とする子ども、障害を抱える子どもの在籍が示されている。特に障害を抱える子どもの保育所における受け入れ数は増加の一途を辿っている。さらに、障害の診断を受けていないが、障害の疑いが感じられる、または保育上の支援を要する「気になる子ども」が全国の保育所の90%以上に在籍していることも示されている。保育現場での「気になる子ども」への保育及び支援は、保育士が中心となって実践されているが、支援には困難が多く伴い、研修等での知識の補充などでは十分な解決に至っていない現状がある。

2. 研究の目的

本研究は、保育施設に勤務する保育者が、「気になる子ども」の個々の特性に応じた適切な対応ができる能力を向上させるための実践プログラム開発のための基礎的資料を得ることを目的とする。具体的には、①既存の発達障害児向けの支援プログラムのエビデンス及び効果について文献検討を行い、保育者のための実践プログラムの基本的枠組みおよび要素を抽出する。②保育施設に勤務する保育者が「気になる子ども」へ実践している対応の現状をインタビュー調査によって収集し、得られた結果をもとに、実践プログラムの開発に向けた示唆を得る。

3. 研究の方法

(1) 文献検討は、次の二段階で実施した。第一段階では、「気になる子ども」は、様々な行動特性を示すことから、保育施設に勤務する保育者が捉える「気になる子ども」の特徴を把握するために、国内文献を用いて文献検討を行った。第二段階では、幼児期にある発達障害児に向けた既存の支援プログラムの内容のエビデンスと効果について、国内外の文献を用いて検討した。

(2) 「気になる子ども」への対応の現状に関する実態調査を実施した。文献検討の結果の段階で選択した支援モデルの枠組みをもとにしたインタビューガイドを用いてインタビュー調査を実施し、保育施設に勤務する保育者が実践している「気になる子ども」への対応について内容分析を行った。なお、本研究は、千葉県立保健医療大学研究倫理審査委員会の承認（2020-20）を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 文献検討

第一段階として、保育施設に勤務する保育者が捉える「気になる子ども」の特徴について把握するために、国内文献53件を用いて文献検討を行った。その結果、多動性や衝動性などの問題行動、癩癩やパニック起こすなどの興奮性、過敏性等の感覚処理問題、集団保育に入れず対人関係が苦手などの社会性の問題、言語発達の遅れ、視線が合わず保育者からの指示が伝わらないなどの行動を示す子どもを「気になる子ども」と捉えていることが示されていた。これらの結果から、「気になる子ども」が示す行動は、自閉スペクトラム障害（以下ASD）や注意欠如・多動症（以下ADHD）の行動特性に類似していると考えられるため、発達障害を抱える子どもの行動面に対し、改善の効果が得られている既存の支援プログラムを柱に検討することは有効であると考え、第二段階の文献検討を行った。

第二段階では、幼児期にあるASD児の行動面の改善に効果があると示されている文献を対象として文献検討を行った。その結果、幼児期のASD児に対する発達行動介入であるアーリースタートデンバーモデル（以下ESDM）の有効性を無作為化比較試験（RCT）で示した研究が2件、音楽療法が2件、関わり方の工夫による個別支援が1件、視覚支援のためのカードの活用1件との結果が得られた。いずれもASD児の症状の改善と適応行動を示すこと、または不適切な行動の減少が認められたとの結果が示されていた。ADHDに関連した文献は学童期以降を対象としていたことから選択しなかった。

2つの文献検討の結果、幼児期にあるASD児の行動面の改善の効果についてエビデンスが十分に示されている研究は少ないことが明らかとなった。これらを踏まえ、「気になる子ども」が示す行動は、幼児期にあるASD児の行動特性に類似していること、ASD児を対象としたESDMの有効性についてはエビデンスが示されていることから、本研究の支援モデルの枠組みをESDMとした。

(2) インタビュー調査

ESDMの発達カリキュラムチェックリストに示されている発達領域を、分析の項目として「受容コミュニケーション」、「表出コミュニケーション」、「社会的スキル・ジョイントアテンション（共同注意）・模倣」、「認知」、「遊び」、「微細運動」、「粗大運動」、「行動」、「身辺自立」の9つに区分した。社会的スキルとジョイントアテンション（共同注意）および模倣に関するチェックリストは、いずれもアイコンタクトについて問われており、語られた「気になる子ども」の様子を分類しにくいことがあるため、本研究では、一つの発達領域としてまとめた。これらの要素を

もとにインタビューガイドを作成し、保育施設に勤務する保育士9名を対象に、「気になる子ども」への対応についてインタビュー調査を実施した。その結果、「受容コミュニケーション」は7件、「表出コミュニケーション」は22件、「社会的スキル・ジョイントアテンション（共同注意）・模倣」は35件、「遊び」は3件、「認知」は3件、「微細運動」は17件、「粗大運動」は15件、「行動」は54件、「身体自立」は20件であった。

ESDMでは、ASD児の発達において社会性およびコミュニケーションの発達の一部と捉えた「模倣」と「ジョイントアテンション（共同注意）」を重視している。今回の結果では、「社会的スキル・ジョイントアテンション・模倣」35件の中で、「模倣」は18件となっていたが、「ジョイントアテンション（共同注意）」は9件と少なかった。

対象者が語った「気になる子ども」は1～3歳児が多く、保育士からは、入園の時点から気になる行動があり、保育施設での集団生活場面（保育活動や食事、午睡など）において強いこだわり行動や危険を伴う行動があると認識されていた。保育士は、職員間で「気になる子ども」についての情報共有を行い、外部研修で得た対応への知識なども活用し、手探りの中で継続的に対応していることが語られた。特に、集団から離れて行動する姿があることや、予測しないタイミングで園舎外に走り出すなどの身体の危険を伴う行動に対しては、「気になる子ども」本人への関わりだけでなく、室内や園舎の門に鍵をかけるなど施設の設備面での対策も併せて行うといった環境調整を図っていることが語られた。さらに、対象者が外部研修により得た行動面への対応方法については、知り得てから速やかに活用しているが、効果を感じる場合ばかりではないことも語られた。集団生活では、昼食場で決まった食材のみ摂取するといったこだわりを示す場合や、午睡時間でも入眠せず遊ぶ姿があり、入眠の場所や方法にこだわりを示すなどの場合は、無理な入眠への誘導や指示は行わず、個別的で柔軟な対応を実施していることが語られた。

一方、「気になる子ども」の「模倣」場面は認識しやすいが、「気になる子ども」の「ジョイントアテンション（共同注意）」の場면을意識して対応している対象者は少ない傾向が明らかとなった。

今回の結果から、集団生活や保育プログラムにおいて「気になる子ども」の運動スキルや身辺自立のスキルについては、一定の対応がなされているが、社会性の発達に関連する発達領域への対応は十分に行えていない可能性が示唆された。

今後は、ESDMが重視する「模倣」と「ジョイントアテンション（共同注意）」を初期支援のベースとし、「気になる子ども」が発達の芽生えを示している発達領域を正確に捉えながら、すべての発達領域を関連させて伸ばすことを実現するための、ESDMの枠組みをもとにしたより効果的な実践プログラムについて検討する必要性が示唆された。

<引用文献>

①Geraldine Dawson, Sally Rogers, Jeffrey Munson, et al .Randomized, Controlled Trial of an Intervention for Toddlers With Autism: The Early Start Denver Model: Pediatrics 2010 ;125(1): 17- 23.

②サリー・J・ロジャーズ&ジェラルディン・ドーソン.Early Start Denver Model for Young Children with Autism 服巻智子監訳. 日本語版. 佐賀：ASD ヴィレッジ出版. 2018. 270-296.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山静和
2. 発表標題 保育者の「気になる子ども」への対応の現状と課題 - 行動面への対応に注目して -
3. 学会等名 全国保育園保健研究大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石川 紀子 (Ishikawa Noriko) (70312965)	和洋女子大学・看護学部・准教授 (32507)	
研究分担者	西野 郁子 (Nishino Ikuko) (80279835)	千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授 (22501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------